

昭和の東南海地震体験談

氏名： 由谷 成史(ゆたに せいし)
生年月日： 昭和9年3月22日
地震を体験した場所： 太地町太地
当時の家族状況： 父、母、姉2人、兄、弟



1) 地震発生時の状況

当時10歳で、小学校4年生だった。12月の寒い時期であった。
当日、家の前の自宅から百メートルほど離れた空き地(小さな畑)で姉と弟と三人で日向ぼっこをしていた。その時、突然、地震が起きた。空き地の前にある水タンクの水がこぼれ流れるほど激しく揺れ動いた。

2) 津波の襲来時の状況

すぐに浜に走り、三人で海の方を見ると、潮がゴォーと泥を巻き上げていた。その様子を見て子供心に何かあると直感が働いた。もちろん津波のことなど知らない。

当時役場より以南は現在のように埋め立てられておらず、海だった。誰かが「津波だー！逃げろ！」と叫んだ。姉は咄嗟に弟の手を掴み走り出した。3人でオークワ(現在は空き地)裏手の高台に避難した。津波のスピードは速く、揺れてから到達するまで5分も経ってはいないだろ、潮は引かずに津波は襲ってきた。(↓写真 避難した高台から見る現在の太地港)

避難した場所から海を見ると、役場方向と漁協組合方向から津波が押し寄せ、ぶつかり合い、波柱は4、50メートル程、立ち上がった。もの凄かった。津波は1波、2波、3波と繰り返して押し寄せ、津波が治まるまで避難していた。繋いであった船が自宅の前を行ったり来たりしていた。周りの人たちがどのように避難していたか全く覚えていない。とにかく自分たちが逃げるのに精一杯だった。



3) 家族の行動・被害

両親は鯨の皮を練る釜を作る為に赤土を取りに出掛けていたため、家にはいなかった。兄は学校へ行っていた。よって家族の誰にも被害はなかった。

4) 集落・周囲の被害

自宅周辺は潮で浸かっただけだったが、オークワの辺りとその東側に奥、辺りまで、津波が進行し、被害が大きかった。

何軒かの小さな家だけ倒壊したことは記憶にある。

幸い太地町では死亡した人はおらず、けが人もいなかった。

これはあとで聞いた話であるが、近くの本橋さん宅のおばあさんとその孫が、自分たちが逃げた高台に上がる方角ではなく、路地を南の方向に逃げたため、津波に追われ、流されたが、幸い路地が狭かったのと、行き止まりであったので、路肩に打ち上げられて助かった。

もし広い路地であったなら、そのまま海まで持って行かれたかもしれない。

5) 地震・津波後の生活

避難していた所から見てもわかるくらい家は住める状態ではなく、家の中はもう無茶苦茶であった。津波により自宅の天井から下 20 センチ位の所まで潮が来ていた。

その後、オークワの裏手に住む人が他人であるにもかかわらず、1 ヶ月ぐらい住まわせてくれ、その間、大工さんに家を修復してもらった。

周りの家も同じような状態で、ただ二階立ての家は二階部分が浸からなかったため、住むことができた。

戦争中であったため、消防団などというものは無かったと思う。

港の周りは、とにかく酷く荒れていたが住民の手によって復旧することができた。

国や県からの援助や支援物資は全くなかった。

ただ小学校で被害にあった生徒のみ運動靴等の支給品が抽選で与えられた。

食べ物は母親が新宮市の高田(山間部)の出身で、その兄弟が百姓だったので、米や野菜は入手できた。しかし、当地は鯨どころであったにもかかわらず、諸事情により(戦争中?)、当時はその肉を口にすることなかった。

学校はすぐに再開となり、地震による被害もなかった。

6) 次の災害への備え

自身の体験で息子夫婦が家を建てる時高台に立てることを進め、建てた。

地震が起きたら、とにかく高い所へ避難する

装備品は家内が用意し置いてある。